

今月の農家さん

先人に学び、
自身で発展させる

守山市小島町
きたがわ けいいち
北川 圭一さん (32才)



令和2年1月1日、ナシを中心に育てる北川農園の4代目経営者になったばかりの北川さん。

約6年間、JAで働いて営農知識を身に付け、退職後は父・作治さんらを手伝いながら、ナシの育て方を学んでいます。

時に失敗しながらも経験を重ね、技術と自信を得た北川さんが次の目標にしたのは、自らの力で一から農業をすること。「一年中いつでも果物がある農園」を目指し、ナシとは旬の時期が異なるイチゴとブルーベリーを新たに育て始めました。

害虫駆除には天敵農法を使うなど、可能な限り農薬を使わない安全・安心な果物づくりに努めるほか、直売所へ来るお客様に、果物の旬を伝えるため、SNSでの情報発信もスタート。

これらの取組みが実を結び、作付け3年目で、イチゴはナシに並ぶ収入の柱になっています。

最後に北川さんは「先人に学ぶ事は多いですが、真似するだけでは、新しいものが生まれません。自身の長所や思いを織り交せてこそ、より良いものが出来ると思います」と語りました。

営農情報

◆元年産水稻の作柄について

令和元年産水稻の1穂あたりのもみ数は昨年並みであったものの、穂数は低温や日照不足の影響でやや少なくなりました。

湖南地域全体では、10aあたりの収量は517kg、作況指数は「98」で「やや不良」となりました。10aあたりの収量が526kg、作況指数「100」であった昨年度と比較すると、やや落ち込んでいます。

◆米づくりは、土づくりから

水稻を作った後、土は痩せます。人間が働いた後に食事を取らないと次の仕事に差し支えるように土も栄養補給を怠ると、次の年に良いお米を作ることができません。まずは、来春の作付けに向けて土づくりを進めましょう。

当JAが推薦する土づくり肥料「とれ太郎」は、ケイ酸吸収率が高く、根や茎が丈夫に育つため、水稻が倒伏に強くなるだけでなく登熟歩合や千粒重の向上につながります。

また「とれ太郎」を散布すると

土壌のpHが高まり、有毒な重金属のカドミウムが、植物の根から吸収されにくい状態になるので、食の安全にも繋がります。

土づくり肥料は、春先まで散布が出来ますので、未散布の方はぜひ、JAへお申込みください。

米づくりでは基本技術を実践に積み重ねることが重要です。その第一歩となる土づくりを、全ての圃場で実施しましょう！

